「反ユダヤ主義」の誕生
――アルトゥーア・ディンターの小説における知の生産――

久保田　浩

I　問題の所在

第一次大戦勃発 20 日前の 1914 年 6 月 8 日、ベルリンでカール・フォルメラー作、マックス・ラインハルト演出の『奇跡』が上演されていた。フォルメラーの名声を世界的たらしめることとなるこの無言劇は、11 年末のロンドン初演を皮切りに、ドイツでは 14 年 4 月末より上演されていたが、この日の上演では警察の介入にまで発展する事件が起こった。第 1 幕の終了直後、聴衆の一人が立ち上がり以下のように絶叫したのである。

> 一人のカトリック教徒としてここで、キリストの宗教がこのように公に冒瀆されることに対して抗議する。ドイツにおいてこのようなことが起こってしまい、我々の最も聖なる感情が縦横無尽に踏みにじられるのを許容し、キリスト教徒が余りにも無関心であるか、或いは余りにも臆病であってそれに抗議することもできないでいることを、極めて遺憾に思うものである。[1)]

『奇跡』は、中世の女子修道院を舞台に、騎士によってさらわれた修道女の代わりにマリアが修道女に扮し、嬰児を連れて帰ってきた修道女とマリアとが入れ替わるというプロットであり、確かに処女懐胎の教義に抵触し

ていると捉えることもできる。けれども、この怒れる観客は同時に次のように叫んだのである。「我々がユダヤ人の手になるこうした事態を許容しなければならぬということは侮蔑行為である」。『奇跡』に対する宗教的「冒瀆」というこの非難は、演出家のユダヤ系オーストリア人ラインハルトへの弾劾でもあったのである。

この怒れる観客は、ドイツ劇作家連盟設立者の一人、自らも劇作家・演出家であったアルトゥーア・ディンターである。彼は従来、政治的民族主義[2)]研究の観点から、急進的反ユダヤ主義の古参ナチ党員と位置づけられてきた。しかし、ディンターが活動した時代の反ユダヤ主義は何よりも文化言説であり、政治言説としてのそれは、社会の広範な諸領域で生産された部分知から複合的に構成された総体的言説の一局面に過ぎない。本稿ではディンターの「反ユダヤ主義」[3)]を、政治運動としてのナチズムを分析の参照枠とする観点からではなく、同時代の諸々の部分知の間の相互浸潤に基づく、大衆化した学知の一様態として考察することを目指す。

II　アルトゥーア・ディンター（1876－1948）略歴[4)]

ディンターはアルザスのミュールハウゼン（ミュールーズ）で、シレジア出身のプロイセン官吏の長子として生まれた。敬虔かつ厳格なローマ・カトリックの教育を受けて育ったが、カトリック信仰への不満を抱き、人生最初の 40 年間は宗教的・哲学的真理の模索の時期であったと後に自ら述懐している[5)]。大学では自然科学と哲学を学び、化学、物理学、地質学で博士号を取得した。学生時代に劇作家としても活躍し、21 歳でデビュー、28 歳の時に初演された、ヴィルヘルム帝政への風刺を内容とするアルザス方言劇は、その反ドイツ的含意の故にフランス語訳版がパリでも上演されている。劇作家・演出家として活動の拠点をベルリンに移した後、先述の連盟を設立し（08 年）、連盟の機関誌の編集主幹を務めてい

る。冒頭の事件の二か月後には、兵役に志願し、陸軍予備役中尉として従軍している。

この事件へとディンターを促した一つの動因は、13 年暮れから 14 年にかけての、ヴァーグナーの娘婿ヒューストン・スチュワート・チェンバレンの著作との邂逅であった。ディンター自身それを、「精神的な再生」[6)]、「自らのドイツ精神の新生」[7)] と名付けており、チェンバレンの人種主義思想が以後のディンターの思想の骨格（「人種主義、理想主義、反ユダヤ主義、ゲルマン神話の一種の普遍的統合」[8)]）を作り上げていく。

従軍中負傷したディンターは、療養中の 14 年末に偶然交霊会に出席し、戦死した連隊の戦友の霊との交信を経験する[9)]。ディンターはその後戦線に復帰するが、病気の為本国に送還され、16 年には除隊となっている。以後、同年に除名された劇作家連盟を、ドイツ演劇界の「ユダヤ化」の温床として糾弾し続け、民族主義的著作家として名声を確立し、時代小説三部作『この時代の罪』（1917 年から 22 年）[10)]、とりわけ第一巻の成功とそこで展開された「反ユダヤ主義」を以て、政治的民族主義陣営で強大な影響力を行使し、ナチ党幹部として活動していく。同時に終始一貫して、民族主義的な政治体制確立の必要十分条件としての「第二の宗教改革」を主張し、27 年には、「心霊キリスト教宗教共同体」を設立し、彼自身が翻訳校訂した福音書と「ルターの宗教改革の完遂」のための主張を思想的中核とする宗教運動を展開していくこととなる。

しかしそれが契機となり、28 年には党籍を剥奪される。ヒトラー政権誕生後、ヒトラーとの和解を図るが叶わず、36 年に共同体の機関誌が発禁となり、翌年共同体にも禁令が下る。42 年には禁令下で地下活動を行っているとの嫌疑で特別法廷が開かれることとなるが、3 か月の禁固刑はヒトラーの恩赦により執行されず、以後終戦に至るまで沈黙を強いられ、著述活動に専念し、戦後の 48 年に没している。また、没後の非ナチ化裁判では「軽度有罪者」と認定されている。

以下、自然科学、創作（劇作・小説）、人種主義、スピリチュアリズム、政党政治、宗教創唱というディンターの多面的活動領域の相互浸潤を「反ユダヤ主義」という知の成立過程として分析していくが、その際、ヴァイマール期初頭に出版された小説三部作を分析の対象とする。次節では、この小説執筆・刊行の文脈を明確にしておく為に、彼の政党政治的活動を概観しておく。

III　活動の場としての民族主義的政党政治

大戦後の 1919 年、民族主義的政治団体の連合体として、反ヴァイマール、反ユダヤ、反左派を掲げる「ドイツ民族防衛抵抗同盟」が結成される[11)]。ディンターは首脳部の一員として同盟結成に関与しており、ディンターの時代小説第一巻を大々的に宣伝していたのもこの同盟であった。他方、第二巻のスピリチュアリズムに根拠づけられた「反ユダヤ主義」に関しては、同盟内部において見解が分かれており、ディンターの政治的反ユダヤ主義とその形而上学的基礎づけ双方が政治的民族主義陣営で共有されていた訳ではないことがわかる。

22 年 6 月に外務大臣ヴァルター・ラーテナウが暗殺され、同盟の成員の関与が判明し、その活動は禁止されるが、ディンターは同盟のラーテナウ批判（「ドイツのユダヤ化を図るボルシェヴィキ」）に基本的には同調していたものの、同盟首脳部の無戦略的で誇大な反ラーテナウ扇動を批判している。同年末、保守的ブルジョワ政党内の右派が「ドイツ民族自由党」として独立し、解散を強いられた同盟員はこの新たな民族主義政党に合流していく[12)]。ディンターは民族自由党の共同設立者でもあり、24 年には当時非合法であったナチ党との会派形成並びに選挙戦協力により、テューリンゲン州議会議員に当選している。この過程で、ヒトラー一揆後の獄中のヒトラーと接触し、ヒトラーからナチ党テューリンゲン管区の指導者

に任命され、民族自由党と距離を取り始め、翌年から非合法のナチ党の再建に尽力していく。25 年にナチ党が再建された際、ヒトラーの講演がバイエルン以外では初めてヴァイマールで行われたこと、更にはディンターの党勢拡大への貢献に対して名誉党員番号「5」がヒトラーから授与されたこと等は、ディンターのテューリンゲンでの活動が初期ナチズム運動にとって有していた意義を示唆している[13)]。

以上のような政党政治家としての彼の活動期が、小説三部作の執筆・出版並びにその広範な普及の時期でもあった。従って、彼が具体的に構想していた社会像がこれらの作品の中に反映され、また読者に受容されていたと言ってよかろう。

しかし、自らの宗教運動をナチズムの根幹に据えようと試みていたディンターは、その宗教的活動を理由に 27 年 9 月にテューリンゲン管区指導者の役職を解かれ、11 月の宗教団体設立後、それまでディンターの党への貢献を高く評価していたヒトラーも、ディンターが宗教問題に拘泥することを厳しく批判し、ディンターは逆に宗教的問題を理解しないヒトラーの無能を批判するという応酬が続き、最終的に党から除名される。けれども、ディンターはヒトラーとの決裂を機に、ヒトラー批判を一層強化し、ヒトラーを「ユダヤ［＝ローマ］・カトリック教会」の手先として糾弾し、帝国議会選挙で党勢が後退した直後の 32 年 11 月には政治団体「ディンター同盟」を設立し、選挙結果をナチ党の没落の前兆と解釈し、「第二の宗教改革」に基づく社会形成を掲げる政党の結成を目指した[14)]。しかし三か月弱後には、ヒトラーを首班とする内閣が誕生し、ディンターの政党政治活動はこれを以て終焉を迎えることとなる。

以上のように、政党政治家としてのディンターは、その「反ユダヤ主義」故に名声を馳せると同時に、ナチ党から駆逐されていくことにもなる。この時期のヒトラーの宗教政策（既存のキリスト教会を基盤とした民族共同体形成）との衝突という観点から見れば、ディンターの「反ユダヤ

主義」は現実政治的言説としては党勢拡大の阻害要因として排除されざるを得なかったと言えようが、観点を変えてみれば、この「反ユダヤ主義」は、狭義の政治言説には集約しきれない多様な諸言説の相互浸潤から成る文化言説でもあったと言える。そしてそれは、彼の三部作に見られる、「キリスト教的」ユートピアを構想する「反ユダヤ主義」の中に読み取ることができる。

IV　時代小説三部作『この時代の罪』に見られる「反ユダヤ主義」

1　第一巻『血に対する罪』（1917 年）における人種論

チェンバレンに捧げられているこの「後期自然主義小説」[15] は、ヴァイマール期におけるベストセラーの一つに数えられ、21 年の時点で 16 版を重ね、発行部数は 23 万部に達していた。本小説の読者数は少なくとも 150 万人と見積もられている[16]。

主人公ヘルマン・ケンプファーの恋愛と結婚生活及びその破局を描くこの小説は、「ユダヤ人種」と「ゲルマン人種」の「混種」の結果とされる驚愕すべき事態を描出する。化学者ヘルマンは度重なる実験の失敗に憔悴し、冬山に出かけ滞在先のホテルで、「その美貌が人目に付くほどの美しいブロンドの女性」（38）と知り合う。後にヘルマンと結婚するこのエリザベトは、出自を隠蔽する為洗礼を受け改名した富裕なユダヤ人企業家とドイツ人女性との間の「混血」であった。この「血に対する罪の呪い」は次のように描写される。二人の間には男子が誕生する。

> ヘルマンは、喜びを湛えながら、看護婦からおくるみに包まれた息子を受け取って腕に抱きかかえようとしたとき、仰天して後ずさりした。黒みがかった肌の、真っ黒な縮れた髪の毛に覆われた、人間に似

た何物かが、彼の方を向いて泣き声を上げていた。老齢の顔立ちの中の長く黒い睫の下から、漆黒の両目がまばたきをしながら彼を見詰めていた。その目は青みがかった仄かな瞬きを発しているようにも見えた。平たくつぶれた鼻は、顔全体に何かしら猿に似た印象を与えていた。子供に目をとめたエリザベトも驚愕の余り、意識を失ってベッドに倒れ込んでしまった。……「お子さんはおじい様にそっくりですね」と医者は言った。「よく知られた現象ですよ。先祖がえり（アタヴィスムス）というんです」。（181）

このように、本小説では物語の展開に沿って絶えず「遺伝学的」《解説》が挿入される。ディンターはこのようにして、「血に対する罪」の具体的表出として彼が即物的に描き出すものを、学問的に確証された事実として次々と提示していく。

第二子をもうけることを二人は決意するが、ヘルマンは人種論的な《実験》を行う。「あらゆる醜悪なるもの」をエリザベトから遠ざけ、「ただ清純で麗しいイメージのみが」心に浮かぶような音楽や絵画や彫刻（例えばベートーベン）のみを彼女の周囲に配した。その姿をエリザベトが目にしないように、息子は施設に送られた。しかし、生まれてきた「子供はまたもや黒い、しかし今回は絵のように見事なユダヤ人の男子であった。母親は子供を見たがった。子供を目にした途端、彼女は大きな悲鳴をあげ、息絶えた」。（204f.）そして生まれたばかりの嬰児もすぐに息を引き取ることとなる。

その後ヘルマンは、かつての「ゲルマン人」の恋人との間に息子がいることを知り、亡くなった彼女に代わり、引き取って養育することとなるが、今度は二人の息子の行状と性格とが彼の比較《観察》の対象となる。恋人との間の父と同名のヘルマンは行動的で覇気があり友情を高く評価し、一方エリザベトとの間のハインリヒは臆病であらゆることにおいて打

算と利害で行動し、名誉心は全く見られない。ある日二人がボート遊びをしている最中に、ハインリヒは水の中に転落してしまい、息子ヘルマンはハインリヒを助ける為に水に飛び込むが、泳げずにパニックに陥っているハインリヒは彼を巻き添えにし、二人とも溺死してしまう。

息子を失ったヘルマンはその後、「体格の良い、青い目の、ブロンドの、成熟した女性」と知り合う。このヨハンナはかつて出産直後に子供を亡くしていた。二人は結婚し、ヨハンナは出産するが、生まれてきた子供は、「黒い縮れ髪の、黒っぽい肌と黒っぽい目の子供、正真正銘のユダヤ人の子供」(265f.)であった。ヘルマンが狂乱する一方、ヨハンナは乳児を殺し、自らも自殺する。ヨハンナは10年前に、婚約者の、洗礼を受けたユダヤ人将校に見捨てられたが、将校との間に子供をもうけていた。そして作中の《解説》は語る。

> 動物飼育における意義深い経験の一つは、純血種の雌がただ一回でも劣等種の雄によって受胎させられた場合、その後純血種の育種は永遠に不能となってしまうということである。このようにして純血種でない雄の血によって生み出された母胎を通して、純血種の女性の有機体全体が毒され、純血でない種へと変化させられ、その結果、その女性は、純血でない子孫を産むことのみが可能となる。それは、純血の雄によって受胎する場合でさえそうなのである。生命体がより高度に発展すればする程、この、種の法則はより顕著に現れてくるのであり、当然のことながら人間においてこの法則の極めて強力なそして深刻な影響が見られることとなるのである。(266)

そして「ユダヤ人」はこうした「科学的事実」をドイツ人の堕落のために利用しており、「ユダヤ人の若者たちは毎年、数千、数万のドイツの娘たちを誘惑しているのである」(266)。以上が本小説の概略である。

ここで描かれている人種論はその正当性を学問的・自然科学的言説によって主張しようと試みている（この点は後段で詳述する）一方、それは同時に宗教的言説にも依拠している。小説の末尾は以下のように締め括られている。

> 物質に対する精神［Geist ＝霊］の勝利をもたらすこと……これこそが、神がゲルマン人を創造したときに定めた目標であった。それ以来、自分の自由意志の罪深い濫用を認めるに至り、苦難と醇化を通して父の家［神の許］に戻る道を模索しようとする誠実な意志を持つ善霊［Geister］たちは、ゲルマン人の中に肉体化し、ユダヤ人種の中に肉体化するのは、原初の時より、神からの離反を惹き起こし、その悪魔の手練手管によって、闘っている魂が父の家へと帰還する道を不断に封鎖しようとしている地獄の存在なのである。（281）

顧慮すべき点は、読者に強烈な具体的イメージを喚起させる即物的な描写は、本書のプロット全体の中で、こうした霊に関する教説を《実証》する《証拠》という役割を担わされていることである。こうして、自然科学的成果として語られたディンターの人種論は、スピリチュアリズム的言説の次元においてその妥当性が根拠づけられていく。そして人種論とスピリチュアリズムとの相互浸潤は第二巻において詳細に展開されることとなる。

2　第二巻『心霊に対する罪』（1920 年）における心霊論

ディンターは交霊会での経験を契機に、精力的に心霊研究に取り組むこととなるが、その結果 19 年秋に本小説が着想され、翌 20 年の 7 月から 9 月までのダーメン（ポンメルン）のユンカー農場滞在中に執筆された。全編にわたって挿入されている高次霊の霊言の大部分は、この農場に居住

していた二人の書記霊媒（本小説はこの二人に捧げられている）を通して得られたものであるとされている（235－239）[17]。本小説は第一巻には及ばなかったものの、出版の翌年には 20 版（10 万部）を重ねている。

ディンターによれば第一巻の中で展開された主張は、「人種問題はひとつの形而上学的な問いである」というものであった（241）。この「形而上学 Metaphysik」は 19 世紀中葉以来のスピリチュアリズムにおいて想定されていたのと同様、講壇哲学的形而上学ではなく、字義通り物理現象・可視的形態（「人種」）の後にあってそれを根拠づけているもの（不可視の力、「霊」）の解明を目指すものであった。つまり、「人種」という可視的形態の背後にあって、その形態論的差異を根拠づけている法則を闡明すること、それが第二巻で説かれている心霊論の課題である。

この小説の概略を人種論との連関を一旦括弧に入れて、心霊論を中心にまとめると次のようになる。著名な乗馬騎手であった 40 歳過ぎのアルミン・フォン・ハルテネック男爵は第一次大戦に従軍したものの、敗戦という不名誉と革命後の社会に失望し自殺を図るが、偶然 18 歳の伯爵令嬢ゲアヒルデ・フォン・グライヒェンの命を助ける。アルミンはその後失望感を抱いたまま登山に向かい、そこで交霊会に出くわす。テーブルターニング、叩音、自動筆記を通じた諸霊との交信、高次霊の霊言、その他諸々の心霊現象を体験し、動物磁気の奥義を知り、霊媒の能力を目の当たりにし、心霊論の教師である技師の指導下で、物質界・霊界の構造について学び、自らの使命が心霊論の普及にあることを悟る。その後、ゲアヒルデと婚約するに至るが、自ら体験した霊との交信に対する疑念と、アルミンに対する愛情との間で揺れ動くゲアヒルデは、生来の自尊心と高慢さ（600 年前の前世で彼女は鍛冶屋の娘だったと知らされる）故に、心霊論への疑念を強める。その結果ゲアヒルデは一方的に婚約破棄を宣言し、彼との関係を断った。失意の中でアルミンは、高次霊より、前世においてアルミンの妻であったゲアヒルデは、他の男性の許に走り、子供を産み、アルミ

ンに養育させたことを、そして、ゲアヒルデは前世での死後、地上界での自らの罪を悔い、来世でアルミンに対し罪の償いをすることを自ら神に願い出て今生に転生してきたにも拘わらず、自らの使命を忘れて、前世と同様、心霊論を拒絶するという「霊に対する罪」を犯すこととなったことを知らされる。

この心霊論小説のプロット展開そのものにおいては、人種論的なモチーフは表に出てこず、人種論的心霊論は、プロットに直接的に関連しない物語中の対話や《解説》部分において現れてきている。

心霊論を説く高次霊並びに技師によれば、この世界は霊である神によって霊的存在として創造されたが、自由意志を神から与えられた霊はそれを濫用することにより、悪しき物質性が生み出され、存在の位階が生じることとなる。従って、神によって創造された人間が纏う肉体は自由意志の濫用の結果であって、霊の地上での暫定的な住処に過ぎない。人間の霊は地上での生活の後（死後）、肉体から離脱して霊界に回帰するが、霊界において進化し、純粋な霊的存在へと帰還し、最終的に「神との再合一」(43)を果たす。しかし、その霊的進化、霊の醇化の階梯において必要とされるのは、繰り返し地上（或いは別の天体）へと肉体化（受肉、再生）し、物欲や肉欲や私欲を克服し、無私の隣人愛を実践していくことである。これが自由意志の濫用により物質性に閉じ込められた霊の自己救済の過程である。

こうしたグノーシス的、アラン・カルデック的論調で展開される心霊論が人種論的心霊論となるのは、霊は自らの運命を決定する際に、自らの責任においてその中に転生する人種を選択するという主張においてである。人種とは霊の進化の度合いに対応した地上での形態であると考えられているのである。「その肉体として消滅した後でもまだ地上の領域に拘泥している霊は全て例外なく、比較的低次の霊の階梯に属するものです」(41f.)。こうして「ユダヤ人」には、「物質的な誤った道」を歩んでいる「悪意を

持った頑なな霊」が受肉していることになる（59）。従って、「ユダヤ人種」の形態論的メルクマールは、私欲と物欲に拘泥する低次霊の転生の表出（「物質主義という原理が肉体化したもの」139）であり、そうした霊（＝人種）との交流が断たれない限り、人類の霊的進化は望めないとされる。このように本小説では、「ユダヤ人」を「物質主義」と結びつける通俗的な反ユダヤ主義言説が、霊の進化の過程において低い次元にある霊が、神（＝霊）から離反しようとする性向（＝物質的欲望への拘泥）故に、地上に「ユダヤ人種」（＝物質主義の体現化）として転生する、という「形而上学」として展開していることがわかる。

こうして「霊に対する罪」とは結局のところ、心霊論が「この世での生についての唯一の遺漏なき、そして同時に唯一の有意味な説明であって、厳密な科学の最も厳格な諸要求と調和しているにも関わらず、物質的な狂気の中に囚われたままの多くの人間はそれを受け入れない」（108）こと、即ちこの心霊論が提供する「認識に対して犯す罪」（110）であるとされる。そして、こうした人種論が心霊論と浸潤しているのと類比的に、この心霊論は更に、キリスト教社会思想として展開していくことになる。

3　第三巻『愛に対する罪』(1922年)における「キリスト教的」ユートピア

第三巻は、前二作に比べると発行部数は少なく、28 年の時点で 3 万部に留まっている。現状のキリスト教会に対する痛烈な批判者であり、ドイツ的宗教としてのキリスト教の刷新を謳っていた反ユダヤ主義的東洋学者パウル・ド・ラガルドに捧げられている本小説のあとがきで、ディンターは自らの宗教的履歴について以下のように記している（328）。チェンバレンに導かれて、福音書をギリシャ語で学び始めることとなった彼は、ラガルドの著作によってドイツ的宗教としての「キリスト教」の本質を理解するに至り、心霊論は、彼をして「ユダヤ的な旧約聖書とユダヤ的・パウロ的なドグマのガラクタ全てを排除した、純粋なるアーリア的キリスト教

の新たな構築」へと向かわせることになった、と。そして、「旧約聖書を捨て去れ。パウロを捨て去れ。キリストに回帰せよ」(330)というスローガンを以てあとがきは締め括られている。

本小説の舞台は、革命直後のポンメルンのユンカー農場であり、そこで家庭教師を務めるカトリック神学博士(新約聖書学者)ヘルムート・シュヴェルトフェーガー(現状の教会を「ローマ・ユダヤ教会」として峻拒している)の口から、革命に賛同する武装農民に向けて「ドイツ的キリスト教」と「本来の」社会主義について語られる。「愛に対する罪」は、社会問題を隣人愛ではなく革命という暴力によって解決しようとすることにあるとされ、その罪に対し、「キリスト教の兄弟愛と隣人愛」(49)に基づく、「救い主が教えた、われらのプロイセンの諸王、そしてわれらがビスマルクが国家の最高の目的と看做した真の共産主義」を対置し、「侯爵であれ労働者であれ、兵士であれ学者であれ、誰しもが全体の中で、必要なそして平等な成員であるような人間的な社会」(52)の構築が説かれる。

こうした「真正なる、まことの共産主義」の主体は、「ユダヤ人」資本家に操作された政治家ではなく、社会の基盤を構成する農民と手工業者であり、故にこの新約学者は武装蜂起する農民に対し、その窮状から抜け出る為の唯一の解決策である「救い主の説いた共産主義」を説いていく。そして、それを実現する鍵は、「ユダヤ人問題」の解決であるとされる(75)[18]。それは決して、「ユダヤ人」の物理的殲滅を意味するものではない。「ユダヤ人問題は、ポグロムによって解決されるものではありません。野蛮な暴力を通して—仮にそうした手段が道徳的に許されるとしての話ですが—解決できるものではないのです」(76)。何故なら、この問題は人種論かつ心霊論の問題でもあるからであるとされ、この神学博士はカルデック的な輪廻転生の法則に基づく霊の進化論を説く。「ユダヤ人問題」は、「ただ精神的[geistig＝霊的]力を通してのみ」(79)解決されるものであるとされるが、まずは法的な手段を通した「ユダヤ人」の排除

が提言されていく（ユダヤ教の法的地位の剥奪、教師・官吏・裁判官からのユダヤ人の排除、ユダヤ人による「凌辱」と「雑種化」からのドイツの血の保護、ユダヤ人の土地所有の禁止、ユダヤ人の移民流入の禁止等々）(82−84)。けれども、それは表面的な法的措置に過ぎず、「最終的な解決は精神的［＝霊的］・道徳的なものでなければならず、それは、わたしたち自身の中に息づいている、利己的で物質主義的な性向をことごとく克服することを通して解決されるものなのです」(85)。こうしてこの神学博士が描き出すのは、「キリスト教」による「我々の内なるユダヤ人」の克服に基づく理想的社会の実現である（89ff.)。

主人公が説く「キリスト教」の創唱者イエスは、人種的には「ユダヤ人」ではなく、「アーリア人」である。従って、イエスは旧約聖書の預言の成就ではなく、新約聖書は旧約聖書の完成でもない（119)。従って、「ユダヤ人の神ヤハウェとわたしたちキリスト者の神」とは別物であるというグノーシス的・マルキオン的神観が開陳され（170f.)、「利己主義と物質主義の上に構築されたユダヤ教の歴史的基盤の殲滅者であり破壊者」(127）であるイエスが説いた教説を、旧約聖書による影響力から救い出すこと、それが先述のスローガンの第一のテーゼ「旧約聖書を捨て去れ」の内実である（183, 202)。

主人公は第二テーゼ（「パウロを捨て去れ」）で、イエスの「純粋なる教え」の「ユダヤ人パウロ」による歪曲を弾劾する（224ff.)。彼は当時の聖書学において、イエス運動の体系化・神学化に貢献した存在としてパウロが高く評価されていることに対し異議を唱え（225)、パウロの書簡（とりわけ「ローマ信徒への手紙」）に現れている「旧約聖書的」「ユダヤ的歪曲」を逐一指摘していく。「ユダヤ人」パウロと「アーリア人」である「真の使徒たち」（特にペテロ）との間の対立、そしてパウロの「暫定的な、見かけ上の勝利」を、この新約学者は教義形成（殊にイエスの贖罪の死）の中に見出している。何故なら、イエスの犠牲死による人間の救済と

いう教義は、死に至るまで自らの「アーリア的」使命に忠実であり続けたイエスの「英雄的」生涯が、「ユダヤ的」に「物質主義」化、「収支計算」化されているからである（226ff.）。

そして第三テーゼ「キリストへ回帰せよ」とは、旧約聖書並びにパウロから解放された、イエスの言行に現れている無私の愛を説く「真理の霊」（ヨハネ福音書 16 章 13 節）に導かれた「心霊キリスト教」の確立による「キリスト教の新たな構築」であると主張される。それは、「利己主義と物質主義からの救済をもたらしてくれるもの」（262f.）であるが、「わたしたちの解放は、第一に精神的［＝霊的］なものであって、わたしたち自身の内なるユダヤ性［Judentum ＝ユダヤ教］の克服を通して勝ち取られなければならない」（271）ことが繰り返され、「純粋なる救い主の教え」を通して、現状のキリスト教に見られる諸教派間の対立が克服され、「ユダヤ的な」ドグマティズムではなく、兄弟愛と隣人愛に基づいた統一（「全世界を包含する救い主の新たな国」）が生み出されるとされる（273f.）。

このように、本小説で描き出されるのは、「ユダヤ人」（それは外的でもあるが、専ら内的な「敵」である）を、「闘いとしての愛」（250）によって克服することにより、「救い主の真の共産主義」「救い主の新たな国」という地上天国を、「ユダヤ人」によって毒されていないドイツ民衆（農民、手工業者）の力によって打ち建てていくというヴィジョンである。

V　知の生産における《小説》と《学問》

1　《小説》という知の媒体

この三部作は、創作という手段による「反ユダヤ主義」という知の生産行為であると言えるが、その芸術性については概ね否定的な評価が下されている。例えば、第一巻の刊行後、ディンターはユダヤ教への名誉棄損の廉で告訴され、その裁判の過程で学者や小説家に所見が求められたが、そ

れによれば、『血に対する罪』は、物語の形式を纏った「ユダヤ教に対する激しい宣伝文書に他ならない」、或いは「何等の文学的価値を伴わない、道徳的にも審美的にも不快な闘争文書」、「低級の扇動文書」とされ、反ユダヤ主義運動に対してさえも悪影響があるであろうという判断も下されている程である[19)]。トーマス・マンも同様な論調で、「文学的には全く無価値で、最も質の悪い三文小説のロマンティシズムで、それは生半可な事実と扇動的な歪曲を述べており、その双方を混ぜ合わせることで精神的な点で危険なものです」と断じている[20)]。一方、ドイツ民族主義的文学史家のアドルフ・バルテルスは、『血に対する罪』で取り扱われた「ユダヤ人問題」の時代的必然性を認め、多くの読者をこの問題と真摯に取り組ませることによって「ドイツの刷新に貢献する」作品であると評価している[21)]。

一方、ディンターの著作の受容をまずその発行部数という観点から考察するならば、それ（少なくとも『血に対する罪』）は、20 年前後のドイツ民族主義的創作という狭いジャンルを超えたベストセラーであったことに疑いを差しはさむ余地はない。更に上述のように少なくとも 150 万人と見積もられた読者層の内実を考える場合、購買者数と並んで、図書館の利用という観点が重要となって来る。後にナチによる焚書の対象となるユダヤ系オーストリア人著作家ヨーゼフ・ロートは 1921 年に、当時のベルリンの図書館の利用状況とディンターの著作に関して以下のように述べている[22)]。第一次大戦後、公立図書館に対して、代価を支払って書籍を借り出す貸本図書館の利用が急速に増えたが、公立図書館の利用者層の多くが知識人層に属しているのに対し、貸本図書館はすべての社会層に開かれており、その利用者の約 5 割が女性である。ロートは、貸本図書館で好んで借り出される図書の分野の一つに、社会主義、東洋哲学と並んで、ドイツ民族主義文学を挙げている。その上で、「『血に対する罪』は、ある貸本図書館ではこの二か月の間に少なくとも 317 回貸し出しの申請があった」[23)]と指摘している。

また、ディンターの小説の読者が抱く「ユダヤ人」像については、ユダヤ系の独文学者アドルフ・レシュニッツァーが回顧的にはあるが、次のように述べている。ディンターの小説（最初の二巻）では、以前から存在する反ユダヤ主義的な決まり文句が「近代化された」表現で（ポルノグラフィーとスピリチュアリズムの装いで）現れているが、これらの大衆的受容が表しているのは、ディンターの描く「悪魔的ユダヤ人」が読者自身の思い描く「ユダヤ人」そのものであるという点である。

> ディンターは事実、ただ、読者が聞きたいと思っていたことを語っているに過ぎず、読者自身が描写したがっていた幻像を描き出したに過ぎないのである。……ドイツ大衆の世界像を統合する構成要素を成していたユダヤ人像は、20、30年代においては、ディンターの書物の中に記録として留められている……この、無制限の憎悪によって描き出されたユダヤ人像と同一のものであった。[24)]

ロートの指摘とレシュニッツァーの診断が示唆している当時の読書文化の一つの様態は、ディンター自身が紹介している『血に対する罪』への反響に対応している。ディンターは第一巻に対する反応の殆どは、庶民であれ知識人であれ女性からであったとした上で、その内容を次のように紹介している。女性たちからの手紙には、ユダヤ人との結婚を思い止まることができた、或いは娘に思い止まらせることができた、婚約を解消させることができた、自分の結婚生活の不幸の理由が解明された、離婚を決意できた、等々ディンターに対する感謝の言葉が綴られているとされている[25)]。

ディンター自身にとっても、「小説」はその《文学的・芸術的価値》によって意義が与えられるものではなく、ある目的に向けての《利用価値》こそがその成否を握るものであった。この点は既にフォルメラーとラインハルトの『奇跡』に向けられた彼の発言からも、また上のような投書内容

を紹介する小説の「あとがき」からも察せられる。その利用価値とは、広範な読者層（特に女性）に到達し、単なる娯楽小説であることを越えて、読者への直接的な影響力の行使を可能とすることであった。従って、ディンターはその「反ユダヤ主義」を自覚的に、こうした利用価値のある「民衆向け」小説という形式を通して喧伝したのである[26)]。しかもその際、読者はディンターによって描き出される《学問》世界へと導き入れられ、《学問的真理》に基づいて判断を下すように求められていくのである。

2　知の生産を担保する《学問》

ディンターが大衆小説という手段に啓蒙的、布教的価値を見出している点は、三部作の形式的構成に見事に見出される。この三部作はそれぞれ「ある時代小説」という副題が冠せられているが、この「小説」には巻末に「註」と「参考文献解説」とが付けられている[27)]。「註」においては、小説本文の記述内容の根拠として他の文献が指示されたり、本文中の引用の原文（ギリシャ語・ヘブライ語テクスト）が示され、それに注解が加えられたり、本文の内容の補足説明等がなされており、所謂学術文献の「註」の体裁を取っている。これは、民衆向け小説という性格からすれば一見奇妙に思われるが、以下の三つの点を考慮すればさほど不可思議なことではない。まず、ドイツ民族主義的小説における特徴として、反ユダヤ主義は文学的描写の対象というよりは《学問的》叙述の対象と見做されていたことを指摘することができる[28)]。ディンターの小説はこの点の例証であると言えよう。第二に、ディンターは一貫して、作中人物に制度化した学問への闘いを挑ませており、学問的通説や世論と看做されているものを「ユダヤ的」影響の下にあるもの、そして、作中人物が説く「厳密な学問」によって克服されるべきものとして描いている。故に、彼の小説は、その主張内容が必然的に《学問的真理》であると述べられるだけではなく、その主張形式が《学問的》体裁を取り、その主張内容の《学問性》を担保す

るという構成になっている。第三に、啓蒙を目論むディンターが想定している読者は、決して無知でい続けることは許されていない。三作に共通するプロット展開の形式は、繰り返し現れてくる、そして時には延々と続く人種論・心霊論・心霊キリスト教に関する、作中人物（や霊）の語り（独白、告知、説教、会話）である。それはプロットの展開と必ずしも密接に結びついていないが、読者はその延々と続く語りの中に組み込まれている学知の学習者の役割を担わされている。例えば、第一巻ではダーウィン、ヘッケル、オストヴァルトを巡って、唯物論と観念論との関連に関する当時の議論に導き入れられ（105ff.）、第二巻では心霊論の根拠として、プラトンのイデア論とカントの認識論が紹介され（44ff.）、第三巻ではユダヤ教聖典の成立史に関する文献学（旧約学、新約学）的並びにオリエント宗教史学的な議論が論じられている（148ff.）。しかもその際、制度的学問の外部に立つ作中人物（失意の化学者、高次霊・心霊論のアデプトの技師、教会制度を否定する新約学者）を通して民衆向けに解釈し直された学知が提供されている。こうした学知の学習者である読者について、先述のロートは以下のように指摘している。

> チェンバレンはこの種の［＝ディンターの］読者にとっては恐らく、余りにも深くかつ学問的に基礎づけられ過ぎているのであろう。……ディンターは彼の師の教説を実践的、文学的に利用しており、こうした読者たちは、チェンバレンを希釈したヴァージョンであるディンターに依拠したがっているのである。[29)]

このように、ディンターが読者に要求し、また読者が期待しているのは、例えばカント自体ではなく、社会の基盤を構成するとディンターが呼ぶところの「民衆」にとっての、そしてディンター自身にとっての《カント》である。1928 年のある読書調査アンケートによれば、19 歳の機械工の男

性は以下のように回答している。「日曜日にはちょっと考えさせられるような本を読むんです。例えば、A・ディンターの『血に対する罪』です。そこには哲学があるんです。この小説はいちばんおもしろい本だと思います」[30)]。この回答は、ディンターの小説が生み出す学知の普及の様態を如実に特徴づけている。

こうした民衆知としての学知（「アーリア人」「民衆」の知）による啓蒙と、専門的学知（「ユダヤ人」の知）に対する憎悪に基づく社会構築を説く三部作は、現状の「ユダヤ的」知が支配する社会・国家の惨状（ディストピア）を描き出すことで、それを陰画として、民衆知に基づく「真の共産主義」の創出を構想しているという点で、第一次大戦の敗北と屈辱とに対処しようとするドイツ民族主義的ユートピアの叙述である[31)]。しかし同時にそれは、「民衆」の為の「民衆的な」学知の生産に他ならなかったのである[32)]。

VI 「反ユダヤ主義」という学知に見るイデオロギー的浸潤

しかし、こうした学知は「思想の混ぜ物」[33)] であり、独自性はなく、分析に値しない「疑似学問」[34)] であるとして片付けられることが多い。しかしながら、ディンターの「反ユダヤ主義」を「疑似学問」であると指摘（糾弾？）することは、それが当時の学知の生産と普及の過程で占めていた位置を説明することと同義ではない。学知が生産され普及する過程は決して、専門化した学問制度の中でのみ観察されるものでないことは、専門的学知の生産者が如何にその知を《学問的》なり《専門的》という自己規定によって、或いは《啓蒙》という戦略によって（逆説的ながら）独占しようとしても、社会の多様なセクターにおいてそうした所謂専門的知識人が予想もしない形態で《学知》なるものが生産され、人口に膾炙していくという事態を押し止めることはできない。故に、ディンターの「疑似学

問」的な民衆知が、如何なる部分知の相互浸潤から構成されることによって、レシュニッツァーの言葉を借りれば「読者自身が描写したがっていた幻像」として機能し得たのかという問いを立てることは決して無意味ではなかろう。

そこでまず小説末尾の「参考文献解説」に着目してみよう。第一巻の人種論小説の参考文献（336ff.）には、冒頭でチェンバレンとゴビノーの二人の人種主義的著作が必読書として挙げられた後に、以下の四つの知の領域における著作群が挙げられている。第一は、人種理論に基づく政治理論並びに人種衛生学思想としてのユダヤ人問題である。ここでは政治的民族主義陣営の著作家（テオドール・フリッチュ、アドルフ・バルテルス等）の著作が挙げられている。第二の著作群としてユダヤ教に関する文献が列挙されている。このリストは、ナチ党幹部アルフレート・ローゼンベルクのタルムード論や反ユダヤ主義的なアッシリア学者フリートリヒ・デリチュのヘブライ語聖書研究と並んで、反ユダヤ教の立場の、一連の護教論的なカトリック神学者の著作から構成されている。第三の著作群はイエス伝であるが、「旧約聖書の破壊者イエス」の教説が「旧約聖書のユダヤ的精神によって混濁させられている」（338）ことを糾弾する、ルター派神学者フリートリヒ・アンダーセンのイエス伝が必読図書として挙げられている[35]。もう一つの領域は、ユダヤ人の世界陰謀論である。

第二巻では（237ff.）[36]、ドイツ語圏におけるスピリチュアリズム関係の文献が列挙され、とりわけ、哲学者・心霊研究者カール・ドゥ・プレルの著作、そしてスピリチュアリズム関係書籍を刊行していたオズヴァルト・ムッツェ出版社刊の一連の書籍、並びに心霊研究の雑誌二件（「民衆向け」と「学問的」）が紹介されている。更に小説中に「引用」されたある高次霊からの霊言集が挙げられている。以上は所謂スピリチュアリズムに関する書籍であり、人種論的心霊論との接点はない。この点で示唆的なのは、人相学者ロベルト・ブルガー＝フィリンゲンの著作『人間の形態

の秘密』『魂と人間の形態』への言及である。ディンターは小説執筆中に滞在していたユンカー農場で彼と出会い、彼の所説によって自分が説く霊の「受肉論の驚くべき証明」を獲得したとされる。ブルガー＝フィリンゲンは人相に基づく心的特徴の解読を専門とし、後にヒトラーの人相学的診断で名を成す、ナチズム的人種学の代表者であるが[37)]、「受肉［＝誕生］の時だけではなく、その後の人生の歩みにおいても、地上での肉体を形作るものは霊であるという事実に基づいて、精神的［＝霊的］人格が身体の形成において完全に表現されるという教説」を立てた人物であるとディンターは評価している。そして、人相のみならず、骨格や筋肉も「霊的人格」を余すところなく表現しているという「事実」をブルガー＝フィリンゲンの教説から読み取っている。

第三巻の「参考文献解説」（325ff.）では、「キリスト教的」社会改革論の前提として、まず「民族主義的刷新」の為の文献として、チェンバレン、ラガルドと並んで、ルターの宗教改革の徹底を説くドイツ的キリスト教の唱道者等の著作が推奨されている。第二に、「宗教的・キリスト教的刷新」の為の文献としては先述のルター派の牧師アンダーセンのイエス伝が再度挙げられている。

こうした文献表を一瞥する限り、ディンターの学知を折衷主義的であると特徴づけることは確かに極めて容易である。「希釈」（ロート）されたチェンバレンやゴビノー等の人種主義的言説が、聖書文献学、宗教史学、人種学、人相学、心霊研究、神学といった諸領域の部分知によって根拠づけられているといった様相を呈しているからである。これらの《学問的成果》は、後世から見れば、時代的拘束性とイデオロギー的偏向から自由ではない著作であるのは言を俟たないが、これらの折衷が「疑似学問」か否かという問いは歴史的に見れば決して容易に答えられるものではない。ある知を「疑似学問」として捉える為には、「疑似的」ではない《学問なるもの》を前提とせざるを得ないからである。ディンターの「反ユダヤ主

義」という学知を「疑似学問」であると指摘することで遂行されている行為は、それが学知であってはならないという、ある学問理解の宣言であって、ディンターの時代にそれが「疑似学問」であったか否かという問いに対する学問史的答えではない。故に必要となってくるのは、ディンターが援用する上に挙げた諸分野からの部分知を、「学問的」なるものとしてディンターが引き合いに出すことができたという事態に着目し、部分知の相互浸潤を必要たらしめているメカニズムに光を当ててみることである。

VII　部分知の相互浸潤と全体知への希求

ディンターが列挙する参考文献の著者たちは、大学教授を含め博士号取得者が殆どである。ディンター自身、自然科学の博士号取得者である。

> わたしは徹底的に訓練された自然科学者で、化学、物理学、植物学、動物学、鉱物学、地質学で国家試験を受け、更に化学、物理学、地質学では博士号学位試験で最優秀の成績をおさめました。学生として、またシュトラスブルク大学化学研究室の講義助手、シュトラスブルクの植物学教育館の上級研究員並びに館長として、これら全ての分野で 10 年間にわたって学問的にのみ仕事をしてきましたし、厳密に実験をしてきました。ですから、わたしは厳しい観察、明晰な思考、論理的矛盾のない判断に慣れ親しんでいます。……わたしにとっては、何にもまして、健全な人間理性が最も大切なものなのです。(『霊』235f.)

こうした「健全な人間理性」を動員した「実験」と「観察」とそこから得られる「論理的矛盾のない判断」、これこそが学者ディンターの学知生産の至上命題であった。彼は、心霊現象が制度的学問の目から見れば、超自

然的、非合理的と断定されていることは承知していたが、この経験知への揺らぐことのない信頼故に、「厳密な科学の最も厳格な諸要求と調和している」心霊論の《学問性》を主張することができた（彼自身が《経験》した「スピリチュアリズムとオカルティズムの出来事は超自然的なことや秘密に満ちたことなどではありません。それらは全く自然的な出来事なのです」。『霊』138）。従って、この経験性への信頼に基づき、人間の内面（「霊」）こそが外面的現象を規定しているという人種的心霊論を展開し得たのであり、外面的現象の「観察」からそれを規定している内面を「論理的」に推論し得るとするブルガー＝フィリンゲンの人相学的知見をも《学問的成果》として受け容れることができたのである。これは小説中で描かれる「学問」のあり方でもある。例えば、ディンターはヘルマンをして、第二子出産前のエリザベトに対して《実験》を行わせ、二人の息子の行状を《観察》させ、アルミンをして心霊現象を《経験》し、《観察》させ、シュヴェルトフェーガーをして《論理的判断》を語らしめている。この《学問》がテクスト（聖書）解釈に援用された場合、「イエスがユダヤ人ではあり得ず、アーリア人であらざるを得ないということは、イエスの人格と教説、その生涯と闘いを心理的・精神的［＝霊的］に分析してみれば、そしてイエスのアーリア的英雄としての態度を見れば、必然的に明らかとなる」[38] という文章に現れているように、内面と外面との照応関係という一元論的かつ決定論的「論理」による解釈が展開されることとなる。こうした「論理」に基づくならば、同じく決定論的な唯物論的議論（それらは「ユダヤ的」とされる）を除くあらゆる部分知を組み入れることが可能となり、例えば聖書文献学、神学、宗教史学、人種学の折衷が可能となっていく。

更に、「混種」を断罪し、「純血」を至上価値とするディンターの「反ユダヤ主義」が折衷的であらざるを得ないのは、「ユダヤ的」であるとして拒絶される制度化された学問という権威に頼ることなくして、「民衆」が

独学で「論理的矛盾のない判断」に至ることが要請されているからである。自然科学者のディンター自身、人種学、聖書学、ユダヤ学等においては独学者であり、独学者の「健全な人間理性」に基づき、タルムードを研究し、聖書を翻訳し、心霊研究を行っていく。化学者ヘルマンは図書館にこもり、「ユダヤ人問題」の解明に勤しみ、ゲアヒルデに去られた騎手アルミンも、全精力を傾けて「あらゆるスピリチュアリズムとオカルティズムの書籍を読んだだけでなく、インド哲学と神智学にも取り組んだ」(228) 独学者として描き出される。ここで、先述のロートの指摘と機械工の若者の読書調査アンケートの回答を想起しておいてもよかろう。貸本図書館の利用者は好んでマルクス、ラサール、カウツキーを、インド哲学、中国哲学を、そしてディンターの人種論小説から哲学を、独学していくのである。

こうした独学による折衷的な学知の生産が要請されるのは、専門知は、物質的側面に拘泥する「ユダヤ的」なるものであって、現実を相互に分断したままに放っておき、人間生活の経験世界を包摂的に把握するものではないと看做されているからである。ディンターが提示している「反ユダヤ主義」とは、結局のところ全体知の謂いに他ならず、独学によるあらゆる知の統合として考えられている。但し、最終的にそうした統合を担保してくれるものとして、心霊論、心霊キリスト教という「宗教」が想定されている。「宗教は真理であり、現実性であり、究極的な至高の現実そのものなのです。宗教は生の全体性であり、わたしたちの感情、思考、意志、実践的行為の総体であり、あらゆる真の文化の創造者なのです」(『愛』174)。

ディンターにとっても彼の読者にとっても、この「現実」は部分知に解体されるような、境界づけられた諸領域の集合体ではなかった。その「現実」とは「生の全体性」そのものであり、そもそも部分知が折衷された

ものでさえなかった。それは、相互に明瞭に境界画定し得ない知の諸領域が浸潤し合って出来上がっている混成体であって、混成体以外の形態を持たないものであった。そして、それこそがディンターが思い描く、人間改革（内なるユダヤ人（＝低次霊の属性）の克服）を通した社会改革（外なるユダヤ人（＝物質主義の体現）の排除）による地上天国実現の為の知であり、それはもとより体系的であったり論理的であったりする必要はなく、ただ「全体性」という名に相応しい一元的な説明可能性のみを有する「反ユダヤ主義」という《学問的》知であったと言える。そしてこの「全体性」という名の混成体の創造は、「ユダヤ人」という「全体性」の外部（！）をも生み出すものであった。

注

1） Frederik D. Tunnat: *Karl Vollmoeller. Ein kosmopolitisches Leben im Zeichen des Mirakels*, Berlin, 2011, S. 86.

2） 本稿で「民族主義的」と表現される場合、それは völkisch を指す。Volk（民族）を至上価値とした社会構築を説く「民族主義」言説の政治的表出は、例えばナチズムである。

3） 本稿ではディンターの複合的な文化言説を括弧つきの「反ユダヤ主義」と表記する。

4） 以下の略歴は主に以下に依る。Manfred Bosch: „„Rasse und Religion sind eins!“ Artur Dinters „Die Sünde wider das Blut“ oder: Autopsie eines furchtbaren Bestsellers“, *Die Ortenau. Veröffentlichungen des Historischen Vereins für Mittelbaden*, Jg. 71 (1991), S. 596-620; Rodler F. Morris/Kenneth P. Wilcox: „Artur Dinter“, in: Bernd Ottnad (Hrsg.): *Badische Biographien*, Neue Folge, Bd. II, Stuttgart, 1987, S. 65-67; Claudia Witte, „Artur Dinter – Die Karriere eines professionellen Antisemiten“, in: Barbara Danckwortt u.a. (Hrsg.): *Historische Rassismusforschung*, Hamburg, 1995, S. 113-151.

5） Artur Dinter: *Die Sünde wider die Liebe. Ein Zeitroman*, 11.- 15. Aufl., Leipzig, 1922, S. 327.

6） Artut Dinter: *Die Sünde wider das Blut. Ein Zeitroman*, 16. Aufl., Leipzig, 1921, S. 343.

7） *Die Sünde wider die Liebe*, S. 328.

8） Witte, a.a.O., S. 120.

9） Artur Dinter: *Die Sünde wider den Geist. Ein Zeitroman*, 12. bis 20. Aufl., Leipzig, 1921, S. 32ff., 235.

10） *Die Sünden der Zeit. Romantrilogie*. 本稿で参照する版の書誌情報については、第一巻は註 6、第二巻は註 9、第三巻は註 5 を参照のこと。以下これらの小説の参照箇所は本文中に頁数を記す。また強調は全て原文による。

11） この同盟は、政治的民族主義団体としては当時最大規模を誇り、1922 年の時点では 18 万人の成員を擁していた。この同盟に関する本文の記述は主に以下に依拠している。Walter Jung: *Ideologische Voraussetzungen, Inhalte und Ziele außenpolitischer Programmatik und Propaganda in der deutschvölkischen Bewegung der Anfangsjahre der Weimarer Republik. Das Beispiel Deutschvölkischer Schutz- und Trutzbund*, Diss. (Universität Göttingen), 2000.

12） Manfred Weißbecker: „Deutschvölkische Freiheitspartei (DVFP), 1922-1933“, in:

Dieter Fricke u.a. (Hrsg.): *Lexikon zur Parteiengeschichte*, Bd. 2, Leipzig, 1984, S. 550-558.

13）Markus Fleischhauer: *Der NS-Gau Thüringen 1939-1945. Eine Struktur- und Funktionsgeschichte*, Köln u. Weimar, 2010, S. 63f., S. 82 (Anm. 289); Donald R. Tracey: „Der Aufstieg der NSDAP bis 1930“, in: Detlev Heiden u.a. (Hrsg.): *Nationalsozialismus in Thüringen*, Weimar, 1995, S. 49-74.

14）Bosch, a.a.O., S. 613.

15）Michael Schmidt, „Im Westen eine ‚Wissenschaft‘... Antisemitismus im völkisch-faschistischen Roman der Weimarer Republik“, in: Hans Otto Horch u.a. (Hrsg.): *Conditio Judaica. Judentum, Antisemitismus und deutschsprachige Literatur vom Ersten Weltkrieg bis 1933/1938*, Dritter Teil, Tübingen, 1993, S. 93-115. この特徴づけは 95 頁に現れてくる。シュミットはディンターの小説を、その自然科学的傾向からドイツにおけるゾラ的な「実験小説」の系譜に位置づけている（106 頁以下を参照のこと）。

16）Werner Jochmann: „Die Ausbreitung des Antisemistimus“, in: Werner E. Mosse (Hrsg.): *Deutsches Judentum in Krieg und Revolution 1916-1923*, Tübingen, 1971, S. 409-510. この数値は 460 頁註 177 に出てくる。

17）本小説におけるスピリチュアリズムについては以下の拙論を参照のこと。「ヴァイマール共和国初期における「霊」「キリスト教」「ユダヤ人」—A・ディンター『霊に対する罪』に見られるスピリチュアリズムの諸相」深澤英隆他編『スピリチュアリティの宗教史（上）』、リトン、2010 年、85－118 頁。

18）1922 年に刊行された本小説は、全体の構想の第一部として執筆されており未完のままである。第二部と併せて刊行されたのは 1928 年になってから（即ち、自らの宗教団体の設立とナチ党からの除名の時期）である。そこでは、第一部でシュヴェルトフェーガーの「心霊キリスト教」に共感したユンカー農場の伯爵令嬢との間の婚約とその破綻、独自の教会設立への彼の決意等について描かれると共に、ニーチェと無神論に関する《解説》が詳述されている。

19）„Armer Artur Dinter!“, *Central-Verein-Zeitung. Blätter für Deutschtum und Judentum*, Jg. 1 (1922), S. 234.

20）前註の新聞には公表された所見が掲載されている。この引用は 1921 年 12 月 13 日付のクルト・マルテンス宛の手紙の中の表現であり、以下に転載されている。Thomas Mann: *Aufsätze, Reden, Essays, Bd. 3, 1919-1925*, Berlin und Weimar, 1986, S. 787.

21）Adolf Bartels: *Geschichte der thüringischen Literatur*, 2. Bd., Jena, 1942, S. 341.

22）Joseph Roth: „Von Büchern und Lesen. Ermittlungen aus den wichtigsten Biblio-

theken Berlins“, *Berliner Tageblatt*, 16.04.1921. この論考は以下に転載されている。»*Das war ein Vorspiel nur ...*« *Bücherverbrennung Deutschland 1933. Voraussetzungen und Folgen, Ausstellung der Akademie der Künste vom 8. Mai bis 3. Juli 1983,* Berlin und Wien, 1983, S. 172f.

23）Roth, a.a.O., S. 172.

24）詩人マルガレーテ・ズスマン宛のレシュニッツァーの書簡（1964 年 8 月 14 日）。以下に転載されている。Manfred Schlösser (Hrsg.): *Auf gespaltenem Pfad* [Festschrift zum neunzigsten Geburtstag von Margarete Susman], Darmstadt, 1964, S. 378-381. 引用は 379 頁。

25）Artur Dinter: *Die Sünde wider das Blut*, 230.-235. Tsd., Leipzig, 1927, S. 339.

26）ebd.

27）第二巻については、「註に相当するもの」（第二巻あとがき、244）として、以下の冊子が単独で刊行されている。Artur Dinter: *Der Kampf um die Geistlehre*, Leipzig, 1921.

28）Schmidt, a.a.O., S. 106.

29）Roth, a.a.O., S. 172.

30）以下に転載されている。Anton Kaes (Hrsg.): *Weimarer Republik. Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1918-1933*, Stuttgart, 1983, S. 309.

31）Jost Hermand: *Der alte Traum vom neuen Reich. Völkische Utopien und Nationalsozialismus*, Frankfurt am Main, 1988, S. 134. この点は、共産主義的ユートピア思想とも共鳴していることは看過できない。

32）即ち、民衆（Volk）の学知は、民族（Volk）のユートピアと同義として描かれている。

33）Bosch, a.a.O., S. 600. また、「ネオプラトニズム、オカルティズム、ユダヤ的な要素から醇化された［とされる］キリスト教を、チェンバレンの人種論と混合した」もの、とも特徴づけられている（Morris/Wilcox, a.a.O., S. 66）。

34）Witte, a.a.O., S. 126. 同頁には、「19 世紀のドイツ精神史の悪ふざけに過ぎる受容」という表現も見られる。

35）アンダーセンのイエス伝については以下の拙論を参照のこと。「近代ドイツ宗教史における「ナザレのイエス」―「アーリア人イエス」を巡って」『キリスト教学』51 号（2009 年）、149－169 頁。

36）註 27 を参照のこと。

37）Marcel Atze: *„Unser Hitler“. Der Hitler-Mythos im Spiegel der deutschprachigen Literatur nach 1945*, Göttingen, 2003, S. 420f.

38）Artur Dinter: *War Jesus ein Jude? Ein Nachweis auf Grund der Geschichte Galiläas, der Zeugnisse der Evangelien und Jesu eigener Lehre*, Leipzig, 1934, S. 26.